

皆様、おはようございます。

アドベントも第2週となりました。

12月の声を聞くとともに大変寒くなりました。車のフロントガラスは夜9時過ぎからカチカチに凍るようになりました。雪もちらつきました。皆様お元気にお過ごしでしたか。

私たちは壮絶なる霧囲気の黙示録からルカによる福音書に移り、クリスマスのストーリーに心をほっとさせていただいておりますが、何かここにやはり連続性を感じます。

このルカ1章の出来事の後、洗礼者ヨハネが生まれ、イエス様が生まれ、その三十数年のイエス様のご生涯のうちに洗礼者ヨハネは獄の中でもごたらしい死を迎えますが、イエス様もまた呪いの木の十字架にかけられ、見世物にされる中、命を落とされました。

その後弟子たちへの迫害は続き、12弟子の中で最後まで生き残ったでしょうヨハネはパトモスへ島流しにされ、そこで啓示を受けます。

暗い、罪深い世の中です。神から遣わされた者たちがなぶられ、痛めつけられて殺されるのです。そして人は神様のひとり子であるイエス様にまで手をかけるのです。堕落しきった、反逆しきった世の中です。天の神様の元から数々の使いが送られ、地に警告がなされます。終わりの時が近いからです。次々と送られる警告は神様からのメッセージです。心を立ち帰らせ、私のもとへ帰れとのメッセージです。

先週の個所、黙示録15章8節にはこうありました。

8すると、聖所は神の栄光とその力とから立ちのぼる煙で満たされ、七人の御使の七つの災害が終ってしまうまでは、だれも聖所にはいることができなかった。

神様のお怒りとその莊厳さとその威光と権威の中、聖所は臨在の煙で満たされ、誰もそこに近づきも入ることも出来なかったとあります。

イエス様の時代、祭司たちはいけにえの血を携えて至聖所に入り契約の箱に臨在される神様の前にひれ伏し神様を礼拝しました。しかし人の罪は世に充满し、祭司、大祭司と言えどもその心は暗く、神のひとり子を排斥して無きものにしようと考えていたほどでしたから、誰が一体神と人の間を調停し、取り次ぐことが出来たというのでしょうか。

5 ユダヤの王ヘロデの世に、アビヤの組の祭司で名をザカリヤという者がいた。その妻はアロン家の娘のひとりで、名をエリサベツといった。

6 ふたりとも神のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた。

名門の家柄で生まれ育った一組の夫婦がいました。ザカリヤとエリサベツは「ふたりとも神

のみまえに正しい人であって、主の戒めと定めとを、みな落度なく行っていた。」と聖書は記しています。

その通りであろうとは思いますが、私には原典ギリシャ語を読むうちに一つの疑問が生じました。

それは、「落ち度なく」という言葉です。落ち度なくという言葉は、行ったという動詞に連なる副詞としてここでは訳出されていますが、原典では形容詞で「非難すべき所のない、欠点のない、潔白な、短所のない、完璧な」という言葉が配置されており、彼らは「落ち度なく、避難すべきところなく、潔白に、完璧に」と副詞的には書いていないのです。

聖書学者の方々が翻訳された聖書にケチをつけるわけではないのですが、そこで私は誤りを犯す危険を承知で、あくまでこの言葉を形容詞として訳するのならば、それはギリシャ語原典でこの「非難すべき所のない、欠点のない、潔白な、短所のない、完璧な」という言葉の直前に配置されている、「主の戒めと定め」という名詞を修飾する形容詞と考え、「非難すべき所のない、欠点のない、潔白な、短所のない、完璧な」「主の戒めと定め」のすべての中を彼ら夫婦は進んでいたと訳してみたいと思うのです。

「非難すべき所のない、欠点のない、潔白な、短所のない、完璧な」「主の戒めと定め」のすべての中を彼ら夫婦は進んでいた。これはすごいことです。子のゆえに彼らは「正しい人」だったと聖書は語ります。

「正しい」という言葉は、神様の標準、意思、ご性質に従う、合致する、同一化する、正しい、義である、神様との正しい関係にあるなどの意味がある言葉です。しかし、この後のザカリヤの、天使への応答の言葉にも分かるように、彼は一面として、神様に心を開いて自分を従わせ、順応させ、同一化するよりも、自分の考えに固執していたことが分かります。まさにローマ3章にあります通りです。

ローマ3:10 次のように書いてある、／「義人はいない、ひとりもいない。

3:11 悟りのある人はいない、／神を求める人はいない。

3:12 すべての人は迷い出て、／ことごとく無益なものになっている。善を行う者はいない、／ひとりもいない。

3:13 彼らののどは、開いた墓であり、／彼らは、その舌で人を欺き、／彼らのくちびるには、まむしの毒があり、

3:14 彼らの口は、のろいと苦い言葉とで満ちている。

3:15 彼らの足は、血を流すのに速く、

3:16 彼らの道には、破壊と悲惨とがある。

3:17 そして、彼らは平和の道を知らない。

3:18 彼らの目の前には、神に対する恐れがない」。

(詩篇 14、53 篇からの引用)

しかしイエス様はご自分の考えに固執されませんでした。イエス様はひたすら父なる神様にご自分を従わせようとされました。

ビリピ 2:4 おのの、自分のことばかりでなく、他人のことも考えなさい。

2:5 キリスト・イエスにあっていだいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。

2:6 キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、

2:7 かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、

2:8 おのれを低くして、死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた。

2:9 それゆえに、神は彼を高く引き上げ、すべての名にまさる名を彼に賜わった。

2:10 それは、イエスの御名によって、天上のもの、地上のもの、地下のものなど、あらゆるもののがひざをかがめ、

2:11 また、あらゆる舌が、「イエス・キリストは主である」と告白して、栄光を父なる神に帰するためである。

人は皆、思い違いをして、神様の道を外れ、力なく彷徨っていました。誰の例外もありません。そのような、弱さに陥った人間に神様は恵みを与え、赦しと救いを与えて下さいました。

7 ところが、エリサベツは不妊の女であったため、彼らには子がなく、そしてふたりともすでに年老いていた。

7 節に「ところが」という言葉がありますが、人生はこのところがの連続です。

正しく進もうと願い、最善を尽くそうと願いながらも挫折し、またやり直し、祈り、涙をぬぐってまた立ち上がる、この連続のような気がします。しかし神様には時があり、御計画があります。

8 さてザカリヤは、その組が当番になり神のみまえに祭司の務をしていたとき、

9 祭司職の慣例に従ってくじを引いたところ、主の聖所にはいって香をたくことになった。

10 香をたいている間、多くの民衆はみな外で祈っていた。

ザカリヤは主の聖所に入り、香をたきます。おごそかなその至聖所での任務。弱き神の民は神殿の外で祈りつつ、神様の御働きを待ち望みます。

その時、ついに神様の時が到来します。

11 すると主の御使が現れて、香壇の右に立った。

12 ザカリヤはこれを見て、おじ惑い、恐怖の念に襲われた。

黙示録のヨハネへの啓示を思い起こさせる展開です。

ザカリヤはこれを見ておじ惑い、恐怖の念に襲われました。

私たちは目には見えなくても、日々このようにして神様の御使いを通してのお導きに預かっているとの自覚があるでしょうか。神様は遠くにおられて目に見えないご存在、決して私たちにお近づきにはなられない、私たちの近くにはおられないご存在と決めつけてはいなさいでしょうか。神様の突然のご介入は私たちの平穏な日常を打ち破る、何か平穏を打ち破られる、招かれざる訪問のようにとらえてはいなさいでしょうか。

13 そこで御使が彼に言った、「恐れるな、ザカリヤよ、あなたの祈が聞きいれられたのだ。あなたの妻エリサベツは男の子を産むであろう。その子をヨハネと名づけなさい。

14 彼はあなたに喜びと楽しみとをもたらし、多くの人々もその誕生を喜ぶであろう。

15 彼は主のみまえに大いなる者となり、ぶどう酒や強い酒をいっさい飲まず、母の胎内にいる時からすでに聖霊に満たされており、

16 そして、イスラエルの多くの子らを、主なる彼らの神に立ち帰らせるであろう。

17 彼はエリヤの靈と力とをもって、みまえに先立って行き、父の心を子に向けさせ、逆らう者に義人の思いを持たせて、整えられた民を主に備えるであろう」。

祈りは聞き入れられた。民の祈り、ザカリヤとエリサベツの祈り、弱くどうにもこうにもならない人間たちの、神の民らの祈りは逐一神様の耳に届いていたのでした。

老年の彼ら夫婦に告げられる喜ばしい出来事の数々。子が生まれるというだけでびっくりなのに、その子が偉大な預言者として働きをなすということなど、これらはザカリヤにとつて喜びの程度をはるかに超えていて、彼の理解の許容値を超えたものでした。

8 するとザカリヤは御使に言った、「どうしてそんな事が、わたしにわかるでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています」。

彼は正しい、神様のみ旨に従う正しい人でした。神様の峻厳な、誤りなき捷と定めのうちを

進む義なる人でした。しかし彼にも弱さがありました。

どうしてそんなことが、どうやったらそんなことが、一体全体どうしてと彼は自分の頭でそれを理解しようとして逡巡し、私、この私は年老いているのですから、そんなことはあり得ないと考えました。

わたし、この私がどういう障害を抱え続け、痛みを抱え続け、それが何十年にも及び、それはもはやにっちもさっちも、どうにもこうにも立ち行かないように固まってしまっているということをご存じないのですか、変わるわけが、解決できるはずが、救われるわけがないではありませんかと、神様に駄目だ、不可能だと説得する、これが私たちの弱さです。愚かさです。不信です。しかし御使いはこう言います。

19 御使が答えて言った、「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである。

私、この私は神の前に立つ者です。神様のことは私はようく、ようく、ようく知っています。しかしあなたは何もわかっていない。あなたが自分のその小さな頭の中で考えられないということが一体何であるか。

「わたしは神のみまえに立つガブリエルであって、この喜ばしい知らせをあなたに語り伝えるために、つかわされたものである。」

私たちは、もう駄目だとか、どうにもならないとか、散々おろかに考えないで、私たちの前に差し出していただいている、この耳に聞かせていただいている、この喜ばしい知らせに心を留めようではありませんか。

20 時が来れば成就するわたしの言葉を信じなかったから、あなたは口がきけなくなり、この事の起る日まで、ものが言えなくなる」。

時が来れば実現するのです。その言葉を信じていく。それが私たちの生き方であり、私たちの希望であり、私たちの喜びです。私たちの花道です。一週一週時が来れば、私たちにはクリスマスの恵みが待っているのです。

遮二無二神様に世迷言を言うような口は、むしろ閉じられてしまった方が身のためです。これ以上神様に減らず口を聞けば、どのような裁きをいただくか分からぬからです。

21 民衆はザカリヤを待っていたので、彼が聖所内で暇どっているのを不思議に思っていた。

22 ついに彼は出てきたが、物が言えなかつたので、人々は彼が聖所内でまぼろしを見たのだと悟った。彼は彼らに合図をするだけで、引きつづき、口がきけないままでいた。

23 それから務の期日が終つたので、家に帰つた。

24 そののち、妻エリサベツはみごもり、五か月のあいだ引きこもっていたが、

25 「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました」と言った。

「主は、今わたしを心にかけてくださって、人々の間からわたしの恥を取り除くために、こうしてくださいました」

今こそ、このようにして、私を心にかけて下さって、喜びを与えて下さった。今、このようにして、なさって下さった。ああ嬉しい、ああ感謝ですとエリサベツは語りました。

いつ、どのようにしてということは、やがて分かるのです。私たちがすべて納得ずくで、分からずとも、奇想天外で理解不能でも、突飛であっても。長らく長らく放っておかれようとも。私たちは恐れず、時が来れば成就する主の言葉を信じ行こうではありませんか。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。「主は今こそこうして私に心を留めて」長年の祈りをかなえて下さいましたと感謝の祈りをささげることが出来るようにななたはお導き下さることを知られ、感謝を申し上げます。いつ、どのように、どんな方法で救いが訪れるのか、皆目分からぬ私たちですが、あなたは時が来れば実現するあなたの喜ばしいお言葉を成就してくださいますから、本当にありがとうございます。子供からお年寄りまで、あらゆる年齢の方々が、この時こそ教会にて、イエス・キリストに出会うことができますようにお願いいたします。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン